2　社会科

「学び方の育成」を意図した学習指導
－地理的分野、第２学年－

(1) 研究の視点

ア　研究の経過

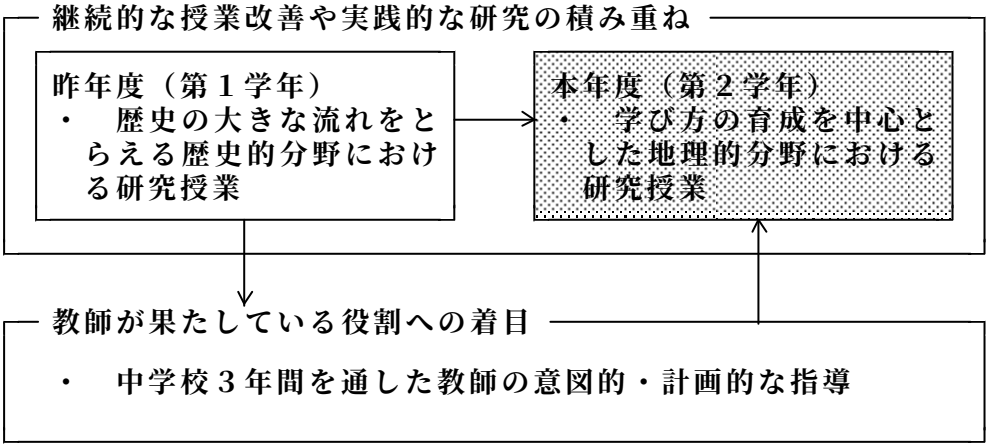
中学校社会科では、第１年次の理論研究を踏まえ、第２年次に研究主題に迫る単元指導計画の開発を行った。単元名は「中世の日本－歴史新聞を作ろう！－」である。歴史的分野の授業としては、歴史の大きな流れと中世の時代的特色をとらえさせることをねらいとする単元である。その指導計画に基づく実践の結果、自己コントロール力と自己肯定感にかかわって生徒のプラス面での変容が見られた。「歴史新聞」の作成を通じて、「歴史の内容がよくわかるようになった」とする生徒が多く見られるなど、基礎的・基本的な内容の確実な定着についても一定の成果が見られた。

こうした第２年次の研究（中学校社会科）のまとめとして、自己コントロール力と自己肯定感をはぐくむ上での、「①教師の役割、②継続的な授業改善の積み重ね」の重要性を指摘しておいた。

また、研究全体のまとめでは、各校種・各教科においておおよそ共通する、今後のあるべき授業の三つの方向性が提案されている（第２集、第３章第５節参照）。中学校社会科の研究では、その中のⅢの視点（「学び方の育成」を重視した授業）を中心として、教師の働きかけと継続的な指導を意識した地理的分野の学習の在り方について研究を深めてみたい。

イ　本年度の研究の視点

下図は、昨年度の研究を踏まえた本年度の研究についての見取り図である。



本年度は、研究主題に迫る継続的な授業改善の一環として、地理的分野での実践的研究を行う。研究対象分野を歴史的分野から地理的分野に移し研究を行うことで、中学校社会科としての学習の在り方を幅広く考えることができると考えたからである。

研究の中心としては、今後のあるべき授業の方向性の一つである、「学び方の育成」に焦点を当てる。中学校学習指導要領（平成10年12月）において、社会科の目標は、学習の過程を重視し、学び方を学ぶ学習の充実を一層重視する観点から見直され、改善が図られた。具体的には、目標に、「社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し」が付加された。

社会科において、学び方は、情報の集め方、調べ方、まとめ方などといった学習技能面に限定されるものではない。社会科で学び方を学ぶ学習を充実させるねらいは、事例を通して課題を追究し、考察する学習などを展開し、その過程において事実認識の方法を身に付けさせることにある。

ところで、柴田義松氏などによる先行研究では、学び方の指導には、次の四つの側面があることが示されている。

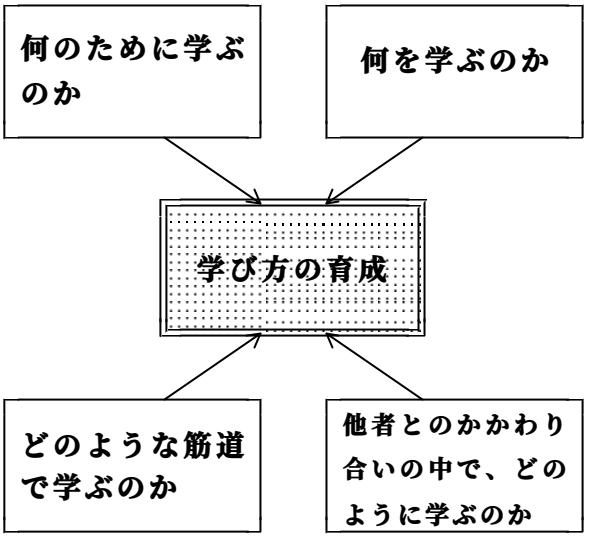
○　**「何のために学ぶのか」**
　　……学習の意義や目的にかかわる指導

○　**「何を学ぶのか」**
　　……学習内容（特に、基礎的・基本的な内容）にかかわる指導

○　**「どのような筋道で学ぶのか」**
　　……問題解決的な学習など、学習過程にかかわる指導

○　**「他者とのかかわり合いの中で、どのように学ぶのか」**
　　……望ましい人間関係の下での学習活動にかかわる指導

図　学び方の指導の四つの側面



本年度の研究では、この四つの側面に留意し、教科の特質に応じた「学び方の育成」を目指す単元指導計画を作成する。指導計画に基づく授業実践は、教師が果たしている役割に着目しながら考察する。個別の指導上の工夫は、３年間を通した教師の意図的・計画的な指導と関連付けて考察することで一層意味をもってくる。また、生徒の学習状況やその変容の把握は、アンケート調査等を通じて行う。

(2) 実践的研究の概要

【実践事例】

単元名　都道府県規模の地域の特色を把握するための学び方を身に付けよう
－　地理的分野・第２学年　－

ア　単元設定の理由

学び方を学ぶ学習の充実を図る観点から、中学校学習指導要領で新設された内容の一つが地理的分野「(2)　地域の規模に応じた調査　イ　都道府県」である。この内容では、事例として選んだ都道府県の地域的特色を明らかにする。取り上げた都道府県については、それぞれ特色ある視点や方法により地域的特色を追究し、そのことを通して地理的な見方や考え方を学ばせる。取り上げなかった地域においても、必要に応じて自らの力でその地域的特色をとらえることができるような学び方を身に付けさせる。

学習指導要領に基づき設定した単元目標は、次のとおりである。

○　事例として取り上げる都道府県の地域的特色を意欲的に追究させ、都道府県規模の

※　柴田義松：「学び方はどのようにして身につくか」（『指導と評価』1999年９月号）

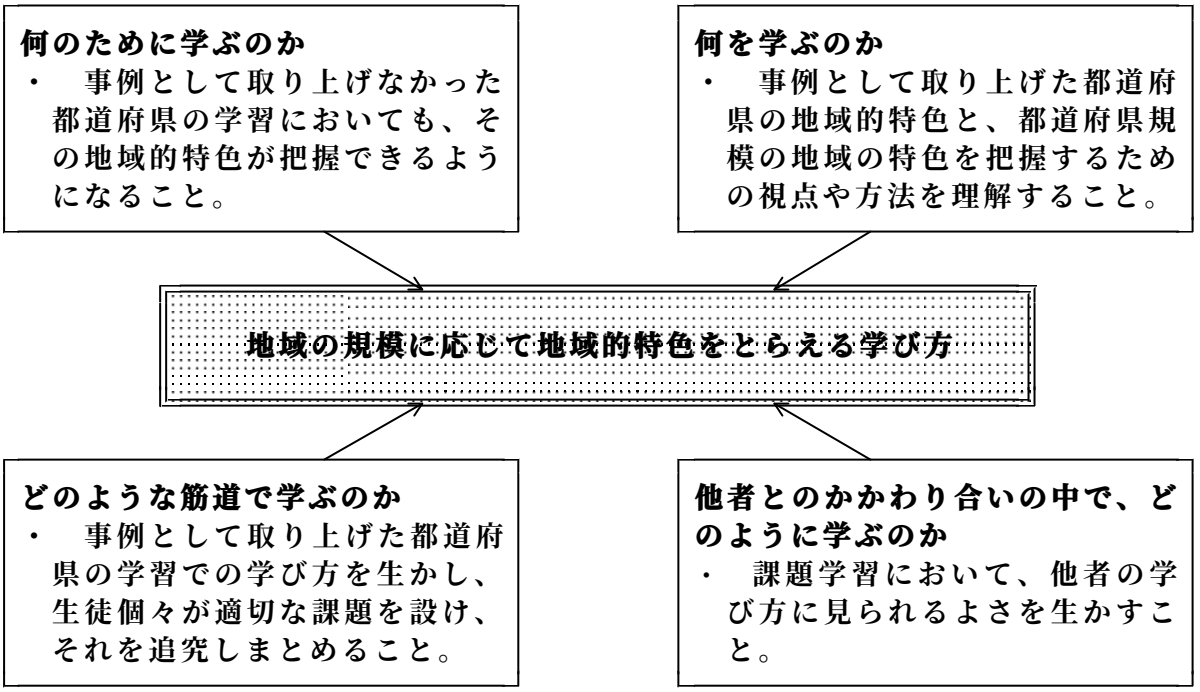
地域の調査に対する関心を高めさせる。

○　都道府県の地域的特色を多面的・多角的に比較・考察させたり、地理的事象から見いだした学習の課題を環境条件や人々の営みなどと関連付けて追究させる。

○　調査する都道府県に関する適切な資料を収集し、選択・活用させるるとともに、調べた過程や結果を地図やグラフなどにまとめたり、発表させたりする。

○　事例として取り上げた都道府県の地域的特色とともに、都道府県規模の地域的特色をとらえる視点や方法を理解させる。

上の指導目標を先述の「学び方の指導の四つの側面」から整理すると次のようになる。



イ　研究の手法と研究の概要

(ｱ) 単元指導計画の特色

○　すべての生徒が共通に学ぶ都道府県の学習

単元の前半では、すべての生徒に共通する都道府県を事例とし、都道府県規模の地域の調査の仕方を２通り指導する。

一つは、自然、歴史、産業、交通、また、それらを関連付けることから浮かび上がってくる地域的特色など、多面的な視点で行う調査の仕方である（「多面的に調べる」）。事例は、教科書掲載の岩手県と学校所在地としての京都府とする。都道府県内の各地の様子の詳細は扱わない。追究の方法としては、地形図や雨温図、統計資料の活用等に重点をおく。

もう一つは、他の都道府県と比較するなどしてとらえた地域的特色から学習のテーマを設定し、その背景や要因を他の事象と関連付けながら追究する調査の仕方である（「テーマを決めて調べる」）。事例は京都府とし、学習のテーマは「なぜ、京都府は伝統文化あふれる地域と言われるのか」とする。追究の方法としては、複数の資料からテーマの追究に関係があるものを選択・活用させることに重点をおく。

なお、二つの調査いずれの指導においても、その調査の仕方を振り返らせる時間を確保する。これは、どのような筋道で学んだのかを振り返らせるためのものである。

○　異なる都道府県の学習

単元の後半では、生徒個々に異なる都道府県を取り上げさせ、課題学習を行わせる。ねらいは、共通の学習で学んだ学び方を生かすことにある。選択した都道府県を調べさせる際には、先に共通の学習で学んだ二つの調査の仕方のうち、どちらに重点をおいて進めるのかを生徒に考えさせる。この指導が、生徒の学習を方向付けることになる。未習の地域であっても、学び方がある程度定着していれば、生徒は、試行錯誤しつつ自己をコントロールしながら学習を進めていくことができよう。

この課題学習では、調査した過程と結果をポスター及び発表用原稿にまとめさせる。ポスター作成の途上で、その交流の時間を設けることにより、他の生徒に見られる学び方のよさを生かして自己の学習を進めていこうとする態度をはぐくむ。この指導は、「他者とのかかわり合いの中でどのように学ぶのか」の側面と関係している。また、取り上げる都道府県が生徒によって異なっていることから、ポスターはオリジナルなものとなる。その分、やり遂げたという実感をもたせ、自己肯定感をはぐくむことになろう。

(ｲ) 単元指導計画（P.74～P.75参照）

(ｳ) 自己コントロール力にかかわる指導上の工夫

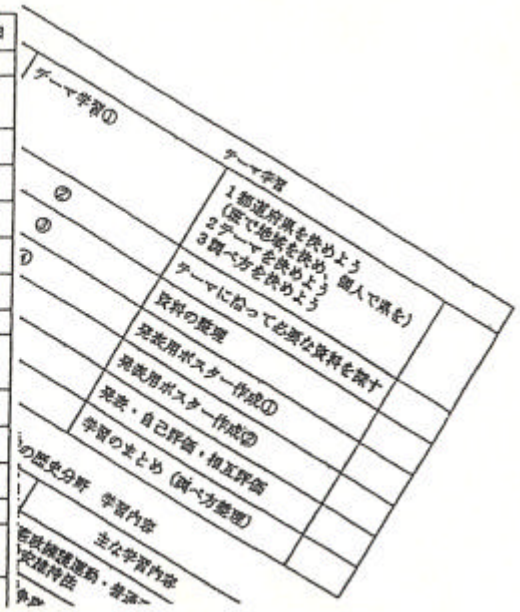
○　学習に見通しをもたせる指導

夏休み明けの最初の授業で、２学期で学ぶ主な内容と、それぞれの学習でのねらいを生徒に伝えた。教師は、これまでも、学期全体の学習に見通しをもたせるために、同じ指導を行ってきている。今回は、それをプリントにして配布し、２学期専用ファイルの最初に綴じさせた。つまり、学期全体の学習の指針を視覚的にとらえさせようとしたところに指導上の工夫がある。

このプリントは、本単元の導入段階で、なぜ都道府県規模の地域の調査の仕方を学ぶのか、そのねらいを説明する際にも活用を図った。

２学期の地理分野　学習内容

No	単元名	主な学習内容	学習日
	夏の課題学習		
1	夏の課題を発表しよう！①	発表テーマ決定（教科書p48～p59）	
2	②	資料の整理	
3	③	発表用ポスター作成①	
4	④	発表用ポスター作成②	
5	⑤	発表・自己評価・相互評価	
6	⑥	学習のまとめ（調べ方整理）	
第3編　世界から見た日本のすがた		第1章　さまざまな面から見た日本（第1節のみ）	
7	1変化に富む世界の地形 2日本の地形	教科書の内容	
8	3世界から見た日本の気候①	教科書の内容	
9	3世界から見た日本の気候②	教科書の内容	
10	4自然災害と人々のくらし	教科書の内容	
第2編　地域の規模に応じた調査		第2章　都道府県の調査	
11	1地域で異なる自然とくらし 2地域の自然を生かした生活	教科書の内容	
12	3地域と産業の結びつき	教科書の内容	



また、単元後半の課題学習では、調査の計画を生徒に立てさせた。その際、生徒に課題追究の方向性を見通させるため、学習の課題とその設定理由、調査方法の予定をワークシートに記入させた。生徒に調査活動を行わせたのは、この後である。結果として、何を調

べたらよいのかが分からず、資料の丸写しに終始する生徒はいなかった。また、発表会で生徒は、自ら設けた課題の設定理由を述べてから、調査結果を発表することができた。

○　基礎的・基本的な内容の確実な定着

都道府県の学習においては、都道府県の位置や名称、大まかな地形を知っておくことが学習の前提になる。また、自然環境から見た日本の特色をある程度理解しておくことが、限られた時間での学習を効果的に進めることになる。こうした理由から、本単元では、これらの内容を丁寧に事前指導しておいた。また、本単元においても、３学期の学習の要点に結び付く事項がある。その内容については、繰り返し復習させたり、定期テストに出題する旨を事前に伝えたりした。

昨年度の研究においても、「歴史新聞」の作成前に、歴史内容の定着を確かめる取組（小テスト）が行われた。教師には、課題学習を行う場合、あらかじめ基礎的・基本的な内容を確実に定着させておくことが大切であるという考えがある。その考えが具体化された取組であった。

なお、テスト形式だけではなく、教師は、日常的に新聞記事を活用し、学習内容を最近のできごとと絡めながら理解させようともしている。いずれにしろ大切なのは、基礎的・基本的な内容が分からないことから起こるいら立ちを避けようとしていることである。

○　学び方を振り返らせる活動

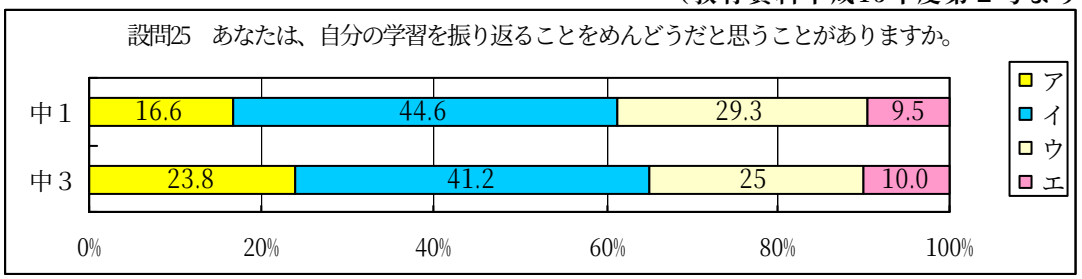
「多面的に調べる」及び「テーマを決めて調べる」のいずれの学習においても、それぞれの学び方を振り返らせるよう努めた。これまでの社会科の授業では、学び方を振り返らせる活動を意識的に行わせることは少なかった。今回は、指導時間を50分ずつとし、十分に時間を確保した。この指導の中で、生徒には、次の３点を思い起こさせたり、考えさせたりしながら調査の際の視点や方法を確認した。

- 実際に用いた資料とその具体的な活用方法。
- どのような筋道で地域的特色を明らかにしていったのか、その追究過程。
- 身に付けた調査の仕方が、今後生かされてくるであろうと考える場面

このような、学び方をモニター（メタ認知）させ、その成果を次の学習活動に生かさせていく指導は、自分の学習を振り返ることに意味を見いださせる指導でもある。

※　昨年度の調査（924名対象）では、「自分の学習を振り返ることをめんどうだと思うこと」について、60％以上の生徒が「よくある」又は「ある」と回答した（中学１年61.2％、中学３年65.0％）。この結果は、自分の学習を振り返ることに意味を見いだしていない生徒の多さを表すものと考える。

（教育資料平成13年度第２号より）



ア　よくある　　イ　ある　　ウ　あまりない　　エ　ない

(ｴ) 自己肯定感にかかわる指導上の工夫

○　成功体験の想起

単元の導入段階で、夏休み中に行わせた身近な地域の調査活動や、９月初旬に行ったその発表会を思い起こさせた。理由は２点ある。第一点目は、身近な地域と都道府県の学習との共通点や相違点を考えさせ、地域の規模に応じた調査の仕方を学ぶ必要性があることを認識させるためである。第二点目は、夏休みの中の調査活動が充実しており、発表会後の自己評価で生徒は高い満足度を示していると教師が判断したことによる。身近な地域の学習と同じく、都道府県の学習においても、学習の課題設定やまとめなどに自己決定の機会がある。自分に自信をなくしがちになる中学校段階で、成功体験を想起させることは、「やればできる」という気持ちをもたせながら学習を進めていくことにつながる。

○　ポスターの交流

課題学習では、調べた過程と成果をポスターにまとめさせたが、その途上で相互の作品を交流し合う機会を意図的に設けた。具体的には、机上に各個人のポスターを置かせ、班を単位として場所をローテーションさせることで､効率よく全員分のポスターを見させた。

ポスターの交流を通じて級友から認められた生徒は、自信をもって学習を進めていくことができた。そうでない生徒も交流によって気付いた内容を参考に、自己のポスター作成を続けた。また、教師自らも、ポスター作成中に生徒の学び方によさを見いだし、その場で褒めたり、学級全体に紹介したりした。

○　学級全体で日本地図を完成させる取組

課題学習において調査活動を始めるに当たり、各生徒に自分が選択した都道府県の白地図を切り抜かせた。それをポスターに写し取らせることで、調べた内容を地図上に表現できるようにするためである。また、写し終った白地図には、主な川、平野、山地・山脈などを記入させ、単元終了後に、全員分つなぎ合わせることで一つの日本地図を完成させた（不足分は教師が用意）。昨年度、「歴史新聞」を作成させたときには、それを歴史的経過の順に並べかえ、全員分を掲示した。学年全員の「歴史新聞」で大きな年表が完成されたわけである。

昨年度同様、この日本地図作成の取組は、学年や学級全体で一つの作品を作りあげたという意識をもたせることにつながった。教師は、社会科学習での作品を、他学年の生徒や教師、保護者にも公開することを基本としている。それは、生徒にとって、より多くの人からの賞賛を得る機会となっている。また、今後、第３学年の公民的分野の学習においても、この方針に基づく取組が予定されている。

ウ　生徒の変容

(ｱ) 主として自己コントロール力にかかわって

○　未習の都道府県を取り上げるときの学習の進め方

単元前後で、未習の都道府県（栃木県）について、地域的特色をとらえようとするときの学習の進め方を問うた。回答人数は、単元前で150人、単元後で155人である。

設問　「都道府県」の学習について、もし、「栃木(とちぎ)県」を取り上げ、その県の特色明らかにしようとするとき、あなたならどのように学習を進めていきますか。

【調べてみたいテーマ】

生徒が調べてみたいと回答したテーマ（上位５項目）は、表のような結果になった。単元前後に共通して、「特産物」「名物」「歴史」が多い。生徒は、都道府県の学習について、その地域で有名な物産や歴史を第一に取り上げようと傾向があることが分かる。

（生徒が回答したテーマ）

	９月	12月
第１位	特産物(35人)	特産物(39人)
第２位	名物　(19人)	産業　(23人)
第３位	歴史　(15人)	名物　(19人)
第４位	方言　(9人)	観光　(10人)
第５位	城　　(8人)	歴史　(8人)

※　「名物」には「有名なもの」、「産業」には「農業」「工業」等を含む。

【そのテーマを調べるときの学習の進め方や工夫】

単元前後で、記述人数に大きな違いが見られたのは次の２点である。

○　情報を「関連」付けながら、地域的特色を把握しようとする。
（単元前　８人　→　単元後　32人）

記述例

・　いちごを作るのにどのような土地にできているか、どのような気候なのかを知る。（テーマ「いちごの国」）
・　地図帳からは、栃木県の地形の特色なんかも見たりして、特産物との関係も見つけられたらいいと思う。（テーマ「特産物」）

○　「比較」という視点を取り入れ、地域的特色を把握しようとする。
（単元前　18人　→　単元後　34人）

記述例

・　京都府と比べたりして、そこから、京都府とどう違うかとかを出していく。（テーマ「栃木の食べ物」）
・　調べたことを分かりやすいように、比較できるものがあれば比較していく。（テーマ「特産物」）

この「関連」や「比較」は、事例として取り上げた都道府県を調べるときの追究の視点であった。調査結果は、それらについて、プラスの変容が見られたことを示す。追究の視点を身に付けた生徒は、今後、未習の都道府県であっても、地域的特色を追究することに筋道立てて粘り強く取り組もうとする自己コントロール力を発揮することが期待される。

裏返して考えるならば、もし、学び方の育成が図られない場合には、地域の「特産物」「名物」を網羅的・羅列的に調べるだけの学習活動にとどまってしまうのではないかということである。

【調べた結果のまとめ方や発表場面での工夫】

この項目では、単元前後で大きな違いが見られなかった。共通して多かった内容は、「わかりやすさ」「伝えたいこと（大事なこと）を中心に」「絵、図、グラフの活用」の３点である（単元前93人、単元後92人）。結果のまとめ方や発表の工夫については、教師が入学時から意図的に指導してきた内容である。

【その他、学習を進めるときに気を付けたいこと】

「自己コントロール力をはぐくむ視点（★）」（単元指導計画の右端の欄）に関係すると考えた回答文を右の表のように整理した。「見通し・計画性」や「自主性」が単元後で増えているのが分かる。

（回答文の分類(人)）

	９月	12月
見通し・計画性	7	13
自主性	2	12
意見・考えの表明	4	5
ていねいさ	1	2

記述例「見通し・計画性」

- 見通しをもって、あせらなくてもよい段階から調べ始める（余裕をもって）。資料不足の時から、やり始めない。
- まず、調べたいことをはっきりさせてからやりたいです。

記述例「自主性」

- 分からないところがあったらすぐ調べたり、聞いたりして理解する。
- 本を写してばかりではなく、自分で自ら進んで聞きこみをしたりする。

記述例「意見・考えの表明」

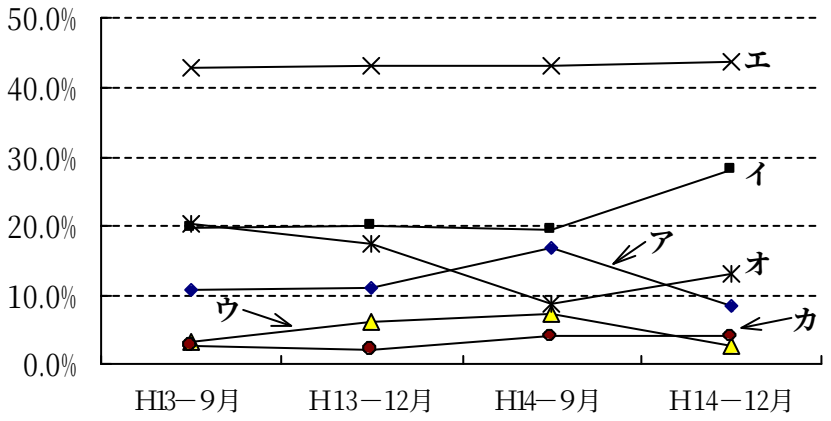
- 本に書いてあったことをまるまる写さず、自分の意見を入れる。

記述例「ていねいさ」

- 最後までていねいに仕上げたい。

○　わからないことやできないことがあるときの対応

設問　「あなたは、社会科の学習で、わからないことやできないことがあるときはどうしますか。」（一つを選択）



ア　そのままにしておく
イ　自分で調べたり、練習したりする
ウ　先生に聞く
エ　友達に聞く
オ　家の人に聞く
カ　その他

昨年度のアンケート調査においても同じ設問を取り入れており、グラフにはそのときのデータを併記している。「イ　自分で調べたり、練習したりする」の回答割合が最も大きいのは、第２学年（平成14年）の12月である（28.1%)。「ア　そのままにしておく」の割合が最も小さいのも同時期の調査である（8.5%)。

類似の設問に、国立教育政策研究所教育課程研究センターが平成14年１・２月に行った調査のものがある。

児童生徒質問紙　共通
設問２(2)　「授業の中で分からないことがあったら、どうすることが多いですか。（あてはまるものをすべて選んで下さい。)」

右の表は、その回答状況を一部抽出したものである。「自分で調べる」と回答した生徒数は、「そのままにしておく」と回答した生徒数のおよそ1.5～1.7倍いる。

（国立教育政策研究所教育課程研究センターの調査結果(人)）

	第１学年	第２学年	第３学年
自分で調べる	33,122	31,280	33,493
そのままにしておく	19,296	20,894	18,421

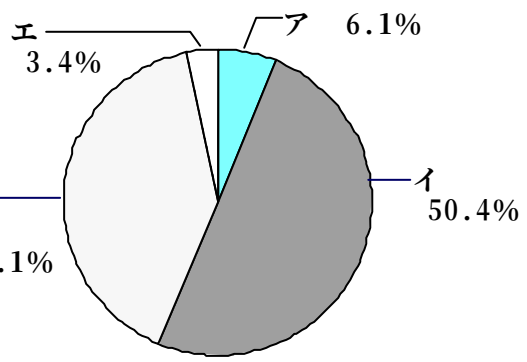
それに対し、今回の研究においては、第２学年の12月の段階で、約３倍の開きとなっている。設問の文言や回答方法が若干異なり、単純な結論付けは早計である。しかし、２学期後半の授業の中心は、地理的分野での学び方を学ぶ学習であった。その学習で「わからないことやできないこと」があったとき、自分で調べた生徒が多くいたことが、アンケート結果になって表れたものと推測できる。

(ｲ) 主として自己肯定感にかかわって

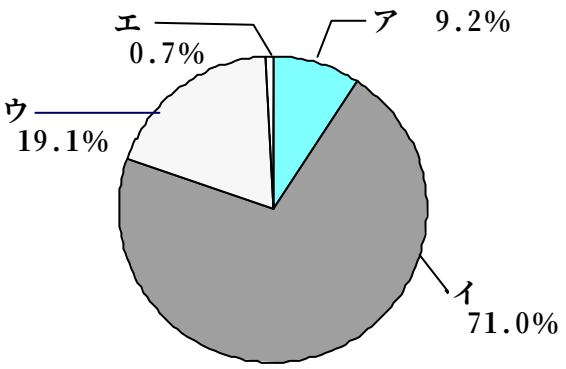
○　学び方が身に付いているか（付いてきたか）に関する生徒の意識

設問　「『都道府県一つ取り上げて学習するときの調べ方や学び方』がどのくらい身に付いている（単元後は「身に付いてきた」）と思いますか。」

（９月）



（12月）



ア　大変身に付いている（付いてきた）　イ　身に付いている（付いてきた）
ウ　あまり身に付いていない（付いてこなかった）　エ　身に付いていない（付いてこなかった）

９月に「ア　大変身に付いている」又は「イ　身に付いている」と回答した生徒の割合は56.5%であった。単元後の12月では、80%を超えている。これは、質問項目にかかわり

自らの向上を感じている生徒の多さを表しているものと考えることができる。共通の学習で身に付けた学び方を生かして、「選択した都道府県の地域的特色を明らかにすることができた」という生徒の達成感がアンケート結果に表れたとも言える。

○　課題追究場面での様子

課題学習で、個々の生徒が取り上げた都道府県の地域的特色をポスターにまとめる作業の途中で、相互の作品を交流し合った。次は、そのときの生徒の発言の一部である。

「すごいなあ」　「面白い」
「すごく頑張ってるなあ」
「見やすいね」　「湖が広いなあ」
「とてもよく分かる」
「地道にやっているなあ」
「誰の作品？　何でこんなにできているの？」

これらは、同じ場所で記録された発言である。内容は、他者のポスターに見られるよさに気付いたことから発せられたものであろう。班ごとにポスターを見る場所を移動したことから、他のグループの作品についても、別の観点での気付きがあったものと考えられる。

発言は、生徒の変容を直接的に示すものではない。しかし、他者からの評価は、それを受けた生徒の自己肯定感を高めることになる。また、どういう点で自分が認められているのかを知ることは、自己理解を深めることになる。

○　発表会を終えての感想

ポスターの発表会に当たり、調べた過程と結果を発表用原稿にまとめさせた。次の各文は、発表会終了後に生徒が書いた感想の一部抜粋である。

これまで４つの調べ学習をしてきて、初めはスペースが余ったり、見やすくなかったけど、今ではだいぶ慣れて書きやすくなってきました。でも、みんなが見たくなるようなポスターじゃなかったり、十分な内容じゃなかったりして、まだまだいっぱいだめなところがあるけど、ポスターを作っていくうちに、題名と関係のある内容を書いたり、必要な資料をいろいろな方法で探せる力がついてよかった。あと、このようなテーマ学習を行って調べていくうちに、これまで知らなかったことや、興味がなかったこともたくさんのことがわかって、歴史・地理にとても関心がわいてきました。（後略）

今までの社会の授業で、新聞やポスターづくりをしてきたけど、初めて書いたときより、だいぶ上手く書いたり、まとめられるようになったような気がしました。（中略）これから、私が行ったことのない県や、全然その県の特産物などを知らない県を調べたいなあと思いました。世界地図を見て、私やみんなが知らない国などを調べたら面白いだろうなあと思いました。

（前略）全体的に言うと、最初は何とも思わなかったことでも、調べてみればすごく楽しくて、知らなかったことをたくさん知る機会なので、調べ学習の時間はすごく良いものだと思った。自分の言いたいことをまとめる力も、調べ方を決めて、それを実行に移す力もついて良かったです。まだまだ、上手にまとめられてはいないけど、他の人のうまいところとかを真似して、もっとうまく書けるようになろうと思います。

（前略）今回の都道府県調べでは、学校での時間をあまり有意義に使えなかったので、家で遅れを取り戻そうとがんばることができました。自分では、まだまだだけど、段々調べることについての関心が出てきたので、次また調べ学習があるのなら、これまで以上のできになるようがんばりたいです。

上の各文からは、学ぶことの楽しさ、達成感、今後の学習に向けた向上心などを読みとることができる。そしてそれらは、単に活動が面白いというのではなく、知ることの喜びに支えられたものとなっている。生徒に、何のために学ぶのかという点について、望ましい見方や考え方が育っていることがうかがえる。

(3) 研究のまとめ

ア　成果と課題

（成果）

○　教科の特質に応じた学び方の指導に、自己コントロール力や自己肯定感をはぐくむ視点を組み込んだ今回の単元指導計画は、研究主題に迫るのに効果的であったと考える。

○　特に、自己コントロール力については、単元前後に未習の地域を取り上げる学習の進め方を問うことにより、どのような自己コントロール力が発揮されるようになったかが想定できた。

○　学び方の指導を「何のために学ぶのか」「何を学ぶのか」「どんな道筋で学ぶのか」「他者とのかかわり合いの中で、どのように学ぶのか」という四つの側面からとらえた。この四つの側面が、研究主題にかかわる指導上の工夫を具体化する観点にもなることが明らかにされた。

○　指導上の工夫は、３年間を通じた教師の意図的・計画的な指導を反映するものであった。このことから、自己コントロール力や自己肯定感をはぐくむ上で、教師の果たす役割の重要性が再認識された。

（課題）

○　社会科において、学び方を学ぶ学習の充実は、他の分野においても求められている。今後、単元指導計画の記載事項のうち、各分野に共通して一般化できる部分は何であり、分野に応じて柔軟に対応する部分は何であるかを考え、指導に当たっていくことが大切である。

○　自己コントロール力については、質問紙法により、ある程度生徒の変容をとらえることができた。それに対し、自己肯定感については、生徒の変容をどのような手法で把握するのかが今後の検討課題である。

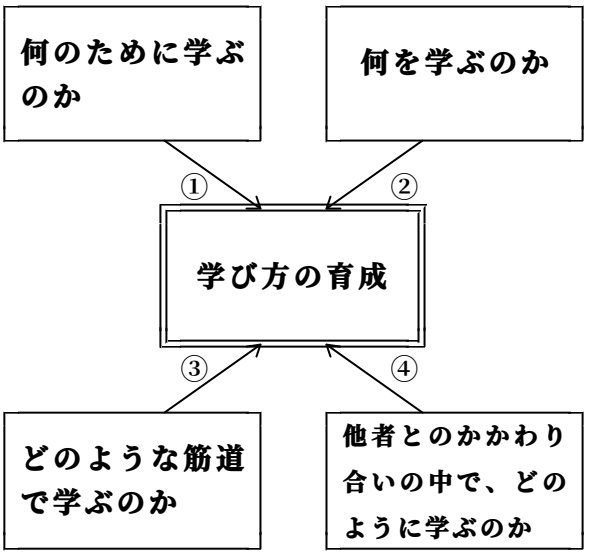
○　自己コントロール力や自己肯定感は、一つの教科の取組だけで育てられるものではな

い。今回の生徒の変容も、受容感のある安定した学校生活が基盤にあってこそのものである。その意味で、生徒のよさを引き出している潜在化カリキュラム（hidden curriculum）を視野に入れ、研究を進めていくことが大切である。

イ　授業改善への提言

本年度の研究では、教科の特質を生かした「学び方の育成」が、自己コントロール力及び自己肯定感をはぐくむ上で有効であることを確かめることができた。最後に、研究で得られた知見を組み込み、「学び方の育成」が、どのように自己コントロール力や自己肯定感とかかわり合っているかをまとめ、授業改善への提言としたい。

図　学び方の指導の四つの側面（再掲）



① 生徒は、「**何のために学ぶのか**」を納得することで、目的意識をもって学習を進める。社会的事象への関心も高めていく。これにより、瑣末な知識をひたすら覚え込むことや、学級の中で、記憶した知識の多さという一次元上に、自他の存在を位置付けてしまうことを避けることができるものと考える。

② 生徒は、何を学んだらよいのかがよく分からないと、イライラ感がつのり、落ち着いて学習に取り組めない。「**何を学ぶのか**」について、それを指導者側がはっきりさせておくことが、生徒の学習活動を方向付ける。また、そのことにより、教師は生徒の興味・関心に応じた適切な教材の開発や、生徒の学習の状況に応じた助言が可能となる。

③ 「**どのような筋道で学ぶのか**」について、社会科は、課題追究的な指導過程が基本となる。学習の課題を多面的・多角的に考察する過程において、生徒は、知識や技能を獲得していくことに面白さを感じる。また、課題解決の過程を振り返らせる指導の中で、生徒は、自らの学びをメタ認知する能力を高める。

④ 社会科の授業は、問いと答えの連続の過程で構成される。その中で、生徒は、様々な見方や考え方、あるいは他者の考えのよさに気付く。そのことが生徒の調べたり考えたりする活動をさらに広げる。また、級友や教師から自分が受け入れられていると感じることは、自己肯定感が実感できる機会となる。「**他者とのかかわり合いの中で、どのように学ぶのか**」についての適切な指導は、自己コントロール力や自己肯定感をはぐくむという点で、学び方の質を高めると言える。

単元名　「都道府県規模の地域の特色を把握するための学び方を身に付けよう」指導計画（全16時間）

時	指導過程・指導内容	学　習　活　動	指　導　上　の　留　意　点	評　　価	自己コントロール力をはぐくむ視点★ 自己肯定感をはぐくむ視点○
1	**導入** ○単元全体の学習に見通しを持たせる。	・単元のねらいと学習の進め方を理解する。 ・身近な地域の学習を思い起こし、都道府県規模の地域の調査との共通点や相違点を考える。	・アンケート調査を活用し、都道府県規模の地域的特色の調べ方について生徒の状況を把握しておく。	・都道府県規模の地域の調査活動に意欲的に取り組もうとしている。 （関・意・態）	★16時間にわたる学習に見通しをもって取り組む姿勢をもつ。 ○身近な地域の学習の際に、オリジナルな作品を完成させたという経験を思い起こす。
4	**調査の仕方の指導①** ○岩手県の地域的特色を多面的に調べさせる。 ○調査の仕方を振り返らせる。 ○京都府の地域的特色を多面的に調べさせる。	・自然、歴史、産業、交通、それらを関連付けることから浮かび上がってくる地域的特色など、多面的な視点から岩手県の特色を追求する。 ・多面的に地域を調べるときの視点や方法を確認する。 ・学習の成果を生かし、京都府の地域的特色を自然、農業、工業、交通などの面から多面的に調べる。	・岩手県を事例とし､地図帳、雨温図、人口推移などの統計資料の活用の仕方を指導する。 ・諸資料を有効に活用することの大切さを実感させる。 ・学習の前提として、京都府の位置、隣接する府県名、府内の主な市町村名などの基本的事項を確認しておく。	・事例として取り上げる都道府県の調査活動に意欲的に取り組もうとしている。 （関・意・態） ・都道府県を多面的に考察したり、都道府県を特色付ける事象を環境条件や人々の営みと関連付けたりしている。 （思・判） ・事例として取り上げる都道府県に関する適切な資料を収集し、地図やグラフ、統計資料を有効に活用している。 （資・表） ・事例として取り上げる都道府県の地域的特色を理解している。 （知・理）	★わからないことがあっても、自主的に調べたり、考えたりする姿勢をもつ。 ○未知の事象を知ったり、既知のことがらについて新しい発見をしたりすることで、学んでいくことのおもしさを味わう。
4	**調査の仕方の指導②** ○テーマを決めて行う都道府県の調査の仕方を理解させる。 ○京都府の地域的特色をテーマを決めて調べさせる。 ○調査の仕方を振り返らせる。	・教科書の内容に沿いながら、テーマを決めて行う調査の進め方の基本を把握する。 ・他の都道府県との比較を通して、京都府の地域的特色を把握する。 ・京都府が「伝統文化」あふれる地域であることの背景や要因を、環境条件、人々の営みなどと関連付けて追求する。 ・テーマを決めて地域を調べるときの視点や方法を確認する。	・地域を特色付ける事象を中心にテーマを決め、諸事象を関連付けていく調査の仕方を理解させる。 ・「伝統文化」の地域としての京都府の特色と、身近な地域における生活文化などとのかかわりを考えさせ、知識と実生活との結びつきを図る。 ・自分たちの住む京都府に対する理解と関心を深め、地域の発展に主体的にかかわろうとする意欲を喚起する。 ・学習活動中に見られた生徒の学び方のよさを積極的に取り上げる。		★わからないことがあっても、自主的に調べたり、考えたりする姿勢をもつ。 ★諸事象間の関連付けは安易に行わず、諸資料に裏付けられた説得力あるものとする。 ○未知の事象を知ったり、既知のことがらについて新しい発見をしたりすることで、学んでいくことのおもしろさを味わう。 ○京都府の調査活動に、身近な地域や岩手県を事例とする都道府県の学習で学んだことが役に立つということに気付く。

※（関・意・態）‥‥社会事象への関心・意欲・態度　（思・判）‥‥社会的な思考・判断　（資・表）‥‥資料活用の技能・表現　（知・理）‥‥社会的事象についての知識・理解

時	指導過程・指導内容	学　習　活　動	指 導 上 の 留 意 点	評　　価	自己コントロール力をはぐくむ視点★ 自己肯定感をはぐくむ視点○
7	**応用・発展** **[課題把握]** ○課題学習の進め方を伝え、調査の計画を立てさせる。	・各自、異なる一つの都道府県を選択する。 ・地域的特色を把握するための具体的な調査内容とその設定理由、調べる方法を考え、ワークシートに記入する。	・計画の立案に当たり、調査の指導の仕方①・②での学び方を参考にするよう促す。 ・単元終了後に課題学習で用いる各自の地形図をつなぎ合わせ、日本地図を作りあげる予定があることを伝え、学習の意欲を喚起する	・選択した都道府県の地域的特色に関心をもち、その調査活動に意欲的に取り組もうとしている。　（関・意・態） ・都道府県の地理的事象から学習の課題を見いだし、それを他の事象と関連付けながら多面的・多角的に考察している。　（思・判） ・選択した都道府県について、諸資料を活用しながら調べた過程や結果をポスターに適切に表現し、その内容を発表している。　（資・技） ・都道府県規模の地域的特色をとらえる視点や方法を理解している。　（知・理）	★限られた時間を有効に活用して、計画的に課題学習を進めようとする。 ○調査内容や調べる方法について、これまでの学習の成果を生かして自己決定する。
	[課題追求] ○取り上げた都道府県について調査活動を行わせる。 ○ポスター及び発表用原稿を作成させる。	・担当する都道府県の白地図を切抜きし、ポスターに写し取る。 ・担当する都道府県についての情報を収集し、課題の追求に関係すると考えるものを選択する。 ・調べ学習を行い、自ら設定した課題を追求する。 ・調べた内容のうち、地図上に表現できるものについては、ポスターに写し取った地図に記入する。 ・地域的特色を表すと考える重要事項や、地図に表現できない内容は、文字や図式化してポスターにまとめる。 ・ポスターの内容を基に、発表用原稿を考える。	・切り抜いた白地図は、後日学級全体でつなぎ合わせるためのものとして残させる。 ・全員分の作品が掲示できるようにポスターはＢ４サイズとする。 ・手持ちの資料で活用できるものを整理しておき、生徒に情報提供する。 ・まとめの途中で、相互のポスターを交流し合い、他者の作品に見られるよさに気付かせる。 ・発表用原稿に、調査の過程についての記述を入れさせる。 ・担当した都道府県の魅力を積極的にアピールする内容を盛り込むよう促す。		★これまで身につけた学び方を生かし、自己の追求活動を方向付けようとする。 ★課題の追求に当たって、資料の丸写しはせず、自らの力で進めようとする。 ★最後まで粘り強くポスターの作成に取り組もうとする。 ○自分のアイデアをポスターに表現できることに喜びを見いだす。 ○よりよいポスターや発表用原稿の完成に向けて、自らのよさを積極的に発揮しようとする。 ○ポスターを完成させた喜びと充実感を味わう。
	[発表・まとめ] ○調査の過程と結果を発表させる。 ○都道府県規模の地域の調査の仕方を振り返らせる。	・班内でポスターと原稿を用いながら発表会を行う。 ・班代表を決め、学級全体での発表会を行う。 ・都道府県の地域的特色を把握するには、様々な調査の仕方があり、それぞれに応じた調査の視点や方法があることを、これまでの学習を振り返りながら把握する。	・作成したポスターがオリジナルなものであることを伝え、自信をもって発表できる雰囲気づくりに努める。 ・アンケート調査を活用し、都道府県規模の地域的特色の調べ方に関する生徒の変容を把握する。	・都道府県規模の地域の調査に対する関心が高まっている。　（関・意・態） ・単元前と比べて、都道府県規模の地域的特色の調べ方についての理解が深まっている。　（知・理）	★自ら発表を行ったり、他者の発表を聞いたりすることで、自己の追究過程をメタ認知する。 ○自他の発表に価値を見いだすとともに、他者の賞賛等から自己肯定感を深める。 ○全員の白地図をつなぎ合わせた地図を見て、学級全体で一つの作品（日本地図）を完成させたという意識をもつ。

※（関・意・態）‥‥社会事象への関心・意欲・態度　（思・判）‥‥社会的な思考・判断　（資・表）‥‥資料活用の技能・表現　（知・理）‥‥社会的事象についての知識・理解